

2024年12月16日

通貨ニュース

インド: 海外投資家によるインド国債投資の現状について

6月末にインド国債が主要な新興市場債券指数(JPMorgan Government Bond Index-Emerging Markets)に組み入れられてから、半年弱が経過した。組み入れ決定、および実施前後にはそれなりに市場の注目を集めたのだが、その後は目立った報道は見られていないのが率直な感想である。かかる中、足許にかけての海外投資家によるインド国債の投資フローを確認するとともに、今後の展望について述べたい。

まず、7月から足許(12月12日)にかけての資金流入額を確認すると、84億ドル程度になる(図表1)。6月27日付の日経新聞朝刊は、『インド国債 踊る市場 JP モルガン、指数組み入れ 1000億ドル規模、流入の試算』と題した記事で、インド国債の指数組み入れを報じている。記事の中では、「今後3~5年で1000億ドル規模の資金流入」とする市場参加者の試算が紹介されている。実績を確認すると、組み入れ開始後の半年弱における流入額は上述の通り84億ドル程度であり、試算を若干ながら下回っているように思える。

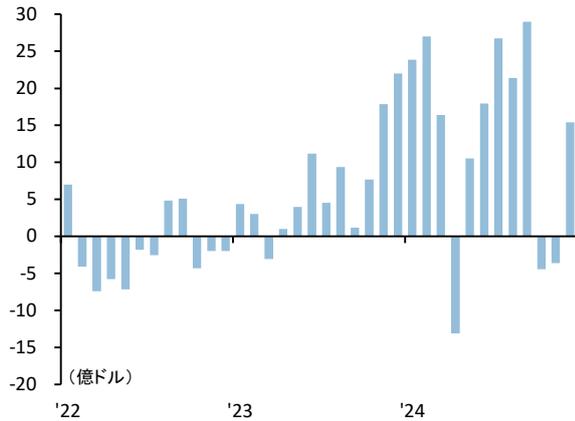
ただ、事前の試算をやや下振れたことを悲観することもないだろう。そもそも、インド準備銀行(RBI、中央銀行)による高金利政策が長引く中で、積極的にインド国債を買う局面でもなかったように思う。むしろ、中銀の動きに反しインド10年金利は年後半に低下基調で推移したが、逆説的に言えば海外投資家による購買意欲がインド金利低下に寄与した側面も一定あるだろう。筆者は上記記事において金利低下圧力とそのメリットについてコメントしたが、結果金融環境が緩和的になってしまい、RBIの高金利政策長期化に一定程度寄与してしまった点は、やや誤算だったようにも思う。いずれにしても、新興市場債券指数組み入れ後の海外投資家によるインド国債投資フローの滑り出しは、期待以上とは言えないものの、総じて順調と言えそうだ。

以上が組み入れ実施から足許にかけての動向だが、今後に関してはどうか。結論から述べれば、今後も既往のペース以上の資金流入が期待できると考えている。最大の要因として、2025年からは他の新興市場債券指数にもインド国債が組み入れられることが挙げられよう。1月からはブルームバーグの指数に、9月からはFTSEの指数に組み入れられることが既に決定している。指数組み入れのメリットは、何よりその機械性だ。指数に投資している以上、インド国債の投資額は自動的に増加する。

具体的な数字を示すことは難しいが、過去の数字を確認する限りにおいては、「3年で1000億ドル」はやや厳しいように思うが、「5年で1000億ドル」は十分射程圏内だろう(図表2)。そもそもインド国債は、海外投資家による保有割合が低いことで有名だ。それでも、2024年6月末時点の保有割合は2.34%と、ここ2年程度では上昇基調にはある(図表3)。今後のアップサイドも十分にあると考えるのが妥当だろう。

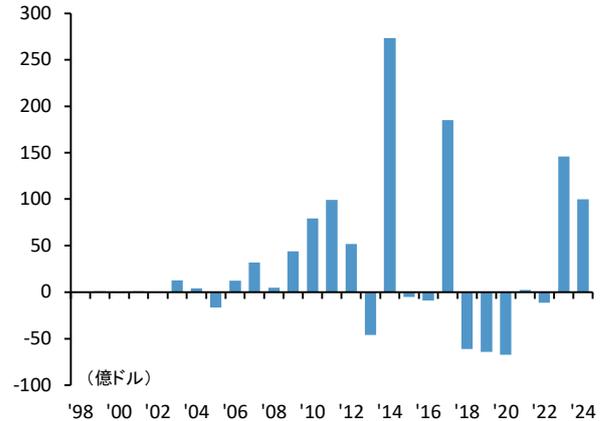
金融市場部
マーケット・エコノミスト
長谷川 久悟
03-3242-7065
kyugo.hasegawa@mizuho-bk.co.jp

図表 1: 海外投資家による債券市場への資金流入(月次)



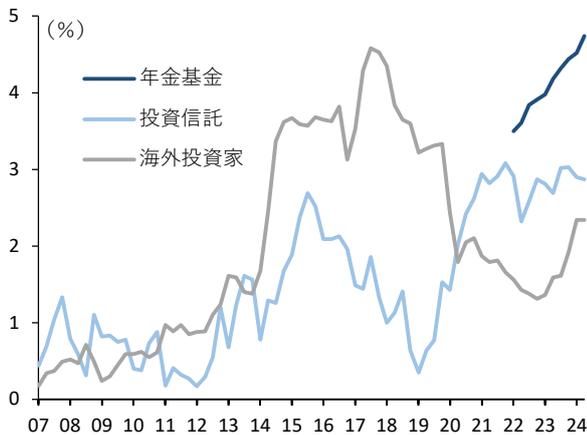
出所: NSDL、ブルームバーグ、みずほ銀行 ※12月分は12日まで

図表 2: 海外投資家による債券市場への資金流入(年次)



出所: NSDL、みずほ銀行
※財政年度ベース、24年度(24年4月~)は12月12日まで

図表 3: インドソブリン債の保有主体別の割合



出所: Macrobond、みずほ銀行 ※最新は24年6月末時点

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。